

横田英史の 書籍紹介コーナー



技術革新と不平等の1000年史 上・下

ダロン・アセモグル、サイモン・ジョンソン、
鬼澤忍・訳、塩原通緒・訳
早川書房 上下とも3,300円(税込)

技術革新(イノベーション)の恩恵に浴するのには主に権力者であり、一般庶民など被支配層が豊かになるケースは、1000年以上にわたる人類史を振り返ったときに極めて少なかったと論じた書。技術革新のネガティブな面を論じる一方で、技術革新で生まれた富を上手く分配したケースにも言及し、バランスに配慮している。

バランスの悪いテクノロジーのポートフォリオによって、繁栄の共有が破壊されたとする。AI幻想を舌鋒鋭く批判しているのも本書の特徴である。AIへの心酔は支配する側を富ませるだけで、民主主義の破壊、労働者や市民の無力化、大規模なデータ収集につながると強い警戒心を示す。

技術革新の在り方を変える方策としては、労働者組織など対抗勢力の結集、巨大テクノロジー企業の解体、富裕税、デジタル広告税、セキュリティネットの強化などを挙げる。

生成AIスキルとしての言語学 ～誰もが「AIと話す」時代におけるヒト とテクノロジーをつなぐ言葉の入門書～

佐野大樹
かんき出版 1,870円(税込)

Googleで生成AI開発に従事する言語学者が、言語学の知見を用いて「生成

AIの能力・知識・スキルを引き出すツボ」を紹介する。体系的・構造的に論じており説得力がある。

プロンプト生成には、どういった選択肢があり、選択肢からどの言葉を使うのが適切か、言葉の使い方で回答にどのような変化があるのかを、言語学的に明らかにする。生成AIは、人間と「対話」ができることに特徴がある。生成AIとの対話で、自分では辿り着けない新しい発想や価値観に出会える可能性が生まれる。その可能性を高めるコツを伝授する。

評価や評価のフィードバックを受ける場合にも、生成AIが役に立つというのは興味深い。ネガティブな評価にも、ポジティブな内容が含まれる。感情に左右されない生成AIなら、内容を再構築して建設的に変えることができるとする。

リサーチのはじめかた ～「きみの問い」を見つけ、育て、 伝える方法～

トマス・S・マラニー、クリストファー・レア、
安原和見・訳
筑摩書房 2,200円(税込)

研究テーマを見つける方法を学生や企業・研究機関向けに懇切丁寧に説明した書。米スタンフォード大学教授と米ブリティッシュ・コロンビア大学教授が18年かけて磨いたノウハウを、手取り足取りで伝授する。研究テーマだけではなく、ちょっとした報告書や論文などにも応用可能である。

筆者は、研究テーマを見つけるためのポイントをいくつか挙げる。例えば「テーマ

を絞り込むのをやめて、まず小さな問いを立てる」「問いに形容詞や副詞があつたら要注意」「1ページも書かないうちにタイトルをつける」などである。筆者が繰り返し強調するのが、頭に浮かんだアイデアを「書くこと」「メモをとること」である。専門用語や仲間内の言葉で誤魔化さないという指摘も良い。「言葉を縮めずに丁寧に説明する」「専門用語を普通の言葉に翻訳する」訳だが、実はこれが難しい。

計測の科学 ～人類が生み出した福音と災厄～

ジェームズ・ヴィンセント、小坂恵理・訳
築地書館 3,520円(税込)

英国のジャーナリストが、計測の歴史を時代背景を交えながら紹介した書。度量衡の統一が、庶民の不公平感をなくし社会秩序の醸成に役立ち、科学の進歩やグローバリゼーションを支えた。計測を巡るエピソード満載の楽しい読み物に仕上がっている。

メートル法の制定が、フランス革命と並行して進められ具体化したというのは初耳だった。フランス革命当時、度量衡の混乱による不公平(同じモノでも価格が異なる)だったという。メートル法を広めたのが外交官のタレーランであり、メートルとキログラムの定着にナポレオンの征服が一役買った逸話を讀むと、教科書からは読み取れない歴史の面白さを感じる。

このほか米国国立標準技術研究所による、ピーナッツバターやタバコ、クジラの脂肪、家庭ごみなど1200種類に及ぶ標準規格の作成には驚かされる。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。
川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグロウヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロステック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役役に就任。2018年3月退任。
2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DXパートナーズ アドバイザリーパートナー、2024年3月(株)観瀾舎を設立 代表取締役社長、現在に至る。

記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係がありません。

